

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)
 A: 十分達成できている
 B: おおむね達成できている
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

学校名	武雄市立御船が丘小学校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標や重点目標の実現へ向けて、保護者や地域の方の理解と協力を得ながら、全職員で計画に沿って取り組むことができ、保護者評価、学校関係者評価においても好意的な評価であった。 ・豊かに学び、高め合う姿が授業や学校生活の中で見られ、自分の目標に向かって意欲的に取り組む児童が増えた。学力向上につながるよう授業改善と家庭学習の更なる充実を目指す。 ・「業務改善・働き方改革の推進」については、業務改善委員会を立ち上げ、時間外勤務の減少など職員も業務の効率化を意識し始めている。さらに、教育活動の充実のために行事・週時程の見直しを進めていく。 ・「読書の推進」については、今後も学校・家庭・地域と連携しながら、児童が読書に親しめるような取り組みを引き続き行っていきたい。
2 学校教育目標	ふるさと武雄に誇りを持ち、心豊かに学びあい、自分の夢や目標にむかって粘り強く努力する児童を地域と共に育成する。
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ① あいさつ・返事・ありがとうが素直に言える子ども ② 豊かに学び、共に高め合う子ども ③ 進んで運動をしたり、夢や目標に向けて努力を続ける子ども

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価				主な担当者	
(1)共通評価項目											
評価項目	取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の手立ての充実を図る。	○「友だちと協力して学習することができた」に対して肯定的な回答をした児童の割合を80%以上にする。 ○「自分が興味をもったことを聞いたり調べたりして学習することができている」に対して肯定的な回答をした児童の割合を80%以上にする。	・全授業の90%以上で、友達と学び合う場面を設定する。 ・児童が自分のペースで学ぶ時間を考えたり主体的に学んだりする場面を設定する。	A	「友だちと協力して～」に対する児童の肯定的な回答が92.3%だった。引き続き、効果的な学び合いがある授業を行っていく。 「自分が興味を～」に対する児童の肯定的な回答は87.9%であった。今後も、児童の興味関心に応じて、自分のペースで学ぶことができる授業を行っていく。	A	「友だちと協力して～」に対する児童の肯定的な回答が92.6%だった。「自分が興味を～」に対する児童の肯定的な回答は88.4%であった。保護者の視点でも、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通じて確かな学力が身につけていると肯定的にとらえる割合が、84.7%から89.2%へと向上した。学習スタイルの質の向上が伺える。	A	・クラスの友達と学年仲間、全学年と遊ぶ喜びを広げるよう、今後も指導してほしい。 ・学び合うことで学力向上が伺える。 ・学習スタイルの質の向上に向けた日々の実践が感じられる。今後も子どもたちの意欲的な学びを期待している。 ・成果指標「80%以上」はもう少し上げてほしいのではないかと。	・学力向上対策C ・研究主任 ・指導法改善	
	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	○教員のタブレット端末を用いた、指導方法的な活用により、授業が理解できたと感じる児童の割合を共に90%以上を目指す。	・職員研修や校内通信において、タブレット端末を用いた授業や実践の紹介を行う。 ・教員の教科指導におけるICT利活用の不安を解消するため、研修を実施する。	A	ICTや生成AIの活用の紹介を定期的に行うことができた。指導方法的な活用率は88%であった。今後も効果的な活用を紹介したい。 ・児童は91.6%、保護者は91.1%がICT利活用の効果について肯定的にとらえており、目標を達成することができている。	A	・職員の改善率は、100%へと大幅に向上した。今後もより効果的な活用を模索したい。 ・児童は94.5%、保護者は、93.6%がICTの利活用の効果に肯定的にとらえており、目標を達成することができた。	A	・ミジンの使い方の違いなどタブレットで学んでいる姿に驚いた。タブレットを文房具のように先生も子どもも使いこなしている事が素晴らしい。児童の将来のために、もっとICT活用を学び、今後の子どもたちの力を最大に伸ばしてもらいたい。 ・職員改善率100%と改善されている。 ・職員一丸となった取組を伺うことができた。改善率100%は学校経営力の大きな成果である。 ・職員研修や校内通信の実践の紹介がよかった。	・教育情報化推進リーダー	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○年2回実施する「生活アンケート」で「学校が楽しい」と回答する児童の割合を90%以上にする。	・道徳便りを発行し、道徳の授業に関する保護者の理解を図る。 ・ふれあい道徳を通し、保護者の関心を高め、学校と家庭が協力して心の教育の充実を図る。	A	「学校生活アンケート」で、「学校が楽しい」と答えている児童は、約92%だった。 ・11月に「ふれあい道徳」の案内を出し、道徳に関する保護者の関心を高めるようにした。 ・代表委員会において、やさしさ溢れる学校にするためにできることを全校で話し合い、取り組む予定である。	A	「心のアンケート」では、保護者・児童ともに「学校が楽しい」と肯定的評価の回答が、90%を上回ることができた。 ・全校で優しい言葉を使う活動に取り組むことで、相手を思いやる心を学校全体で育むことができた。 ・11月の「ふれあい道徳」の前後に「道徳だより」を発行し、授業のねらいや、感想を共有することで、保護者の関心を高めることができた。	A	・「学校が楽しい」と100%の子どもたちが回答できるといい。居心地がいい、安心して過ごせるといふと思う。 ・学校で友達と会ったのが「うれしい」「楽しい」と言う児童が増えてほしい。 ・学校の取組成果が出ている。 ・武雄市青少年育成市民家族で作る標語コンクールに応募したらどうか。 ・子ども達に「学校は楽しい！」を感じてもらおう教師の使命と語るでしよう。 ・優しい言葉を使う活動に取り組むことで、相手を思いやる心を学校全体で育む。	・道徳教育推進担当 ・各学年主任	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめの防止・解決について組織的対応ができていると回答した職員100%を目指す。	・学校生活アンケート(児童と保護者)及び児童との個人面談を年2回実施する。 ・心のアンケートを見直し、年3回実施するとともに、職員連絡会等で情報を共有し、早期発見、早期対応に努める。 ・4～6年生を対象としたいじめ防止教室を年に1回実施する。	A	・職員アンケートで組織的対応ができたとの回答は100%だった。 ・児童や保護者のアンケート回答をもとに児童との個人面談を実施し、いじめの早期発見、早期対応につながった。毎週の職員連絡会でも情報共有を行っている。ハートボックスを設置し早期対応に努めている。 ・6月にいじめ防止教室を実施した。 ・夏季休業中に全職員いじめ対応研修を行い、組織的対応について共通理解を図った。 ・夏季休業終わりに一人一端末を活用してアンケートを実施し、児童の状況を把握し対応することができた。	A	・アンケートや日ごろの観察等から、いじめの早期発見や早期解決に努め、学年団、関係職員、職員全体で組織的に対応することができた。 ・「心の教育」や「いじめ防止」に関する児童と保護者の評価は全体として非常に高く、中間評価から最終評価にかけてさらに向上した。「いじわるをしないでやさしく接しているか」の問いに対し、児童の96.4%が肯定的に回答しており、他者への思いやりが行動として定着していることが伺える。 ・楽しく学校生活を送れていると回答した児童は93.3%に達しており、困ったときに「先生や友達に助けってもらっている」と感じる児童も91.2%と高い水準にある。	A	・いじめの防止、発見の後と対応が大変だと思う子どもにとって安心して過ごせるように願っている。いじめに対しての意識を高め、いじめのない学校を取り組んでほしい。 ・早期発見、早期取組、先生方全員の取組成果ができている。引き続き後フォローをお願いしたい。 ・他者への思いやりが行動として定着していることが伺える。	・生徒指導主任 ・各学年主任	
	◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒85%以上にする。 ●「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童生徒を85%以上にする。	・各教科や学校行事等を通して、自らの夢や目標について考える時間や振り返る場面を設け、キャリアパスポートを活用する。(学期に2回以上実施) ・児童の活躍した場面で積極的に教師が認め、「ほめるから、はじめる。はじめる。」を意識して実践する。	A	「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童は、88.3%で目標値を上回ることができた。目標を立てるだけでなく、振り返る場を設定し、自覚を促すことができた結果だと考える。 「先生は、あなたのよいところががんばりをほめてくれる」と肯定的な回答をした児童は89.7%であり目標値を上回ることができた。今後も子どもを認め、ほめる意識を継続していきたい。	A	「将来の夢や目標をもっている」について、職員の肯定的な回答が79.2%から94.4%へと劇的に改善した。保護者の評価も70.8%から80.0%へと9.2ポイント上昇しており、学校行事や授業を通じたキャリア教育の取り組みが、子ども達の将来を考える意欲に結びつくと考えられる。	A	・児童が、将来の目標となる企画を実施してほしい。 ・先生方の向上の成果を感謝します。 ・キャリア教育の成果が確実にできていると感じる。 ・キャリア教育の取り組みが、子どもたちの将来を考える意欲に結びついた。	(主)教務主任 (副)各教科主任	
	○児童生徒が、人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を通して、人間の尊厳を知るとともに、あらゆる差別を見抜き、差別を許さない人格を養う教育活動	○人権集会・平和集会で実施する人権に関するアンケートで、肯定的な回答をする児童の割合を80%以上にする。	・年1回以上、職員の人権意識を高める職員研修の実施。 ・人権集会・人権週間での人権に関するアンケートの実施。 ・全校を対象とした人権教室を年に1回実施する。	A	「学級の友達や下級生にやさしく接している」に対して肯定的な回答をした児童は93.2%であり、今後も、引き続き、人権教育の充実を努めていく。 ・命や平和の尊厳を考えられるように、7月に平和集会を実施した。 ・夏休みにQUアンケートの分析を行い、学級や学年の実態や互いの実践を交流し合う機会を設定した。	A	・人権集会では、差別・人権に関する知識理解と人権感覚の涵養を目指して、読み聞かせと人権標語等の発表を行った。児童アンケートでは92%の肯定的な回答が得られた。全校で、「思いやり」について考えることができた。 ・道徳の授業等で、人権教育教材を活用するように周知し、主に「ジンちゃんケンちゃん」を取り入れた授業をすることができた。	A	・小・中学生の人権標語はどれも素晴らしい作品ばかり。子どもたちが人権について考えているのがよくわかる。 ・差別がない、思いやりの多い児童に育ててほしい。 ・引き続き、印象に残る思い出に残る取組をお願いする。 ・「思いやり」について考えることができたのは良いことである。	・人権・同和教育担当 ・低中高担当者 ・各学年主任	

●健康・体づくり	①「運動習慣の改善や定着化」	①授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒75%以上にする。	・昨年度の調査結果と比較し、記録の伸びを確認させることで、運動意欲を高める。 ・体づくり週間を設け、全クラスで取り組ませる。 ・学習カードを活用した体育の学習を推進する。	A	・児童アンケートでは、運動への取り組みに対して89.3%が肯定的な回答、保護者アンケートでは、運動習慣改善や体育的行事の推進に対して87.2%が肯定的な回答であった。 ・これまでの積み重ねのデータを共有し、学習カード等の資料を提供することができた。 ・下半期は、低・中・高学年それぞれに、体づくり運動やスポーツチャレンジに関する資料を提供したり、掲示物を作成したりして、授業での取り組みや活用を促す。	A	・児童アンケートでは、運動への取り組みに対して92.0%が肯定的な回答、保護者アンケートでは、余暇時間での外遊びの推進に対して88.3%が肯定的な回答であった。児童と一緒に外遊びを行う教員が多く、外で遊ぶことを楽しむ姿が多く見られた。 ・体づくり運動の奨励のために、佐賀県全体で取り組んでいるスポーツチャレンジを全学年に周知し、取り組んだ結果を児童玄関前に掲示した。多くの学年が様々な種目に取り組み、記録が伸びる喜びや競い合う喜びを味わった。 ・学習カード等の資料の共有ができた。引き続き今後も行いたい。	A	・体を動かすことの必要性を学び、いろんな遊びやスポーツ体験を実施して、体づくりを考えるように指導をしてほしい。 ・各種取り組みの成果だと感じている。 ・体づくり部の取組に更なる継続を願いたい。	●体育主任 体づくり部長
	⑥「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	⑥「健康に良い食事をしている」児童90%以上を目指す。	・放送による食育指導の実施。 ・児童によるポスター作成の実施。 ・朝ごはん取り組みカードの実施。 (6月、11月) ・望ましい食週間等について、学校ホームページを活用して家庭・地域へ啓発する。 ・給食週間の設定。	B	・児童アンケートでは、健康に良い食事(毎日3食食事をする、好き嫌いが無いなど)をしている児童の割合は81.1%であった。 ・6月に「早寝・早起き・朝ごはん取組カード」に全児童が取り組み、家庭との連携を図ることができた。 ・給食委員会の児童を中心に食育についてのポスター作成、掲示を行い、啓発を行った。 ・日々の給食時間に給食の紹介や旬の食材など、食に関する放送を実施している。 ・学校ホームページで日々の給食について紹介を行っている。	A	・アンケートでは、保護者は88.3%、児童は93.5%の肯定的な回答であった。1月に再度「早寝・早起き・朝ごはん取組カード」に全児童が取り組み、早寝・早起き・朝ごはんの習慣化を促すとともに、家庭との連携を図った。 ・食育授業に各学年取り組み、家庭においても実践を図った。 ・1月の給食週間では、給食調理の様子や地域の食材について動画で知らせ、食に対する関心を高め、感謝の気持ちを育むよい機会となった。	A	・早寝・早起き・朝ごはんの習慣化が定着するとよい。 ・命について学び、大切な体(身)をつくるには「食べること」が必要なことを理解させ、感謝の気持ちをもつようしてほしい。 ・家庭での取り組みは意識の違いもありますが、連携が図られていると思う。 ・日頃の熱心なご指導に感謝します。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」と言います。益々のご指導に期待しております。 ・4~6年生は比較的良好く食べる。	●給食指導
	④「安全に関する資質・能力の育成」	○「安全面を考慮して行動している」児童90%以上にする。	・長期休みの自転車点検の実施。 ・年度初めの交通安全教室(全学年)の実施。 ・夏休み前の鉄道安全教室の実施。	A	・アンケートでは保護者は91.8%児童は96.1%の肯定的な回答であった。児童や保護者の安全への意識は高かった。 ・全校朝会や長期休み前後の交通安全指導と共に、日常の安全指導や、地域家庭での安全防災意識を高められるよう、放送など機会を捉えて指導を行った。 ・下校中の交通事故や校内でのけがが見られたため、日常の安全指導も継続していく。	A	・交通ルールやマナーを守る意識について、児童の肯定的な回答は98.1%と極めて高く、職員の評価も87.5%から94.4%へと向上した。「子どもファースト」の考え方や、下校経路の指導など、安全に学校生活を送れる環境を整えていることが、保護者が安心して送り出せる要因となっている。 ・児童の大きなけがはなかったが、校内外での小さなけがはあった。廊下や道路歩行など安全面のマナーやきまりについては、引き続き日常の安全指導や生活のめあてとして、全校で学年で学級で繰り返し重ねて指導していきたい。	A	・いつ、どこで、何が起きるかも日頃から気を付けて行動するように指導してほしい。 ・地域での取組も実施していきたい。 ・横断歩道を渡った後の「振り返り挨拶」には好感がもてる。習慣化された姿に先生方の指導のおかげと感謝している。	●安全・交通指導
●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上を目指す。	・職員一人一人のワークライフバランスに十分配慮することで、各自が健康的に教育活動に従事できる環境を整える。 ・自発的な時間外勤務時間が月80時間を超過している職員(延べ人数)割合の縮減を図る。 ・出退勤管理システムを活用し、月末の集計確認だけでなく、日々の累計にも目を向けて時間外勤務の時間が長くなりそうな職員には積極的な声掛けを行う。 ・長期休業中に年休を取得しやすくするために、職員研修をなるべく長期休業中に入れられないようにする。	B	・男性職員の子育て休暇プラン計画に基づき、出産補助休暇や配偶者出産時育休休暇を完全取得できた。 ・自発的な時間外勤務時間が月80時間を超過している職員は、4月から10月までで1人もいなかった。しかし、月45時間を超過している職員は、4月から10月までに6人(のべ23人)いるので、引き続き時間外勤務時間削減について声掛けを行っていく。 ・昨年度の夏季休業中に実施していた職員研修のうち7つを削減したり課業日中に実施したりすることで、年休を取得しやすいようにした。	B	・4月から12月までの自発的な時間外勤務時間の一人当たりの月平均は17時間20分で、前年度に比べ3時間以上減っている。掃除を朝の時間に設定することで、放課後の時間を確保したことが主な要因であると考えられる。 ・年間14日以上年休を取得した職員の割合は、35人中24人で69%であった。年休取得が少なかった職員に声掛けを行い、年休取得促進を図る。	A	・年休取得率が上がるようにお願いします。 ・先生方の時間外勤務が前年より減っているのはいい。これからもさらに努力してほしい。 ・体を休めて、さらに児童に向き合ってもらいたい。 ・先生の意識の問題や考え方の違いもありますが、取組の成果と思う。 ・校長先生の指導の下、大きな成果をあげられている様子が伺える。先生方の「ゆとり」につながっている。	管理職【校長・教頭】	
●特別支援教育の充実	○要支援児童への支援体制の確立	○対象児童の実態把握や支援を適切に行うため、「個別的教育支援計画」や「指導計画」を活用する。夏休みまでに支援計画を70%作成する。 ○全職員で児童の情報を共有し、学年会での支援の在り方検討する時間を月に1回以上設け、全員が同じ方向で指導・支援を行う。	・学年会や職員連絡会で随時、児童の情報共有の時間を設けて、全職員で共通理解を図る。 ・必要に応じて学年支援会議や校内支援会議を開き、児童の支援体制を整える。 ・実態把握シートと「個別的教育支援計画」に基づいて、SC・SSWや専門機関との連携を図り、より実態に応じた支援を行う。	A	・支援学級に在籍する児童の支援計画・指導計画は80%以上の作成率であり、通常学級で指導計画が必要な児童の分の作成率は70%以上である。 ・週1回の連絡会で支援が必要な児童の共通理解を図り、その後、必要に応じて校内支援会議を開いている。細やかに支援体制を計画・実行・見直しを行い通常級の児童にも支援ができています。また、SC・SSW等とも連携を図り、支援している。	A	・特別支援教育に対する評価は、職員100%、保護者89.5%で、保護者が職員へ、また職員同士の意思疎通や支援体制の確立など理解と実践が伴う結果となった。 ・支援学級等において、連絡帳を通じてこまめに様子を共有することで、病院や放課後デイサービスとの情報共有がスムーズになるなど、外部機関との連携の基盤としても役立っている。今後、児童自身がさらに安心して学べる環境を提供できるように支援の在り方を考えていくことが大切だと考える。	A	・支援学級が以前からすると増えているが、先生方のご負担も増えているのではと思う。 ・特別支援教育については、大変難しいと思いますが、理解を深めて支援をしてほしい。 ・子供のことを考えた先生方に感謝します。	・特別支援教育主任 ・特別支援教育C ・特別支援学級担任

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
				進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○地域連携の推進	○コミュニティスクールの推進と確立	○公民館を核とした地域との連携に努め、情報交換や情報発信を行う。(年2回以上) ○地域人材を招いての授業や行事を実践する。(全学年、年1回以上)	・公民館における児童関連事業の調整を行い、積極的参加呼びかけを行う。 ・授業や行事でのみふねサポーターの協力を推進する。	A	・公民館関連のチラシ配布時に参加を呼びかけ、児童も積極的に参加している。 ・みふねサポーターの協力を得て、栽培活動、町探検、ミシン学習等、学年に応じて授業に入って支援してもらっている。児童も回を重ねるごとに、交流が深まり安全で楽しい学びにつながっている。	A	・最終アンケートで、肯定的に回答した児童が93.9%、保護者が94.4%、職員が100%だった。 ・ミシンの学習では32名の婦人会の方に、昔遊びには7名の老人会の方に協力いただいた。栽培活動やお筆の学習・武雄ソーラン・読み聞かせなど、たくさんの方々に体験活動へ支援してもらい、児童との交流も図れた。 ・2月には、18名のみふねサポーターをお招きして「感謝の会」を開くことができた。	A	・サポーターとして参加したが、きっかけがないと学校との関りはできないので、良い取り組みだった。 ・多くの地域の方の支援・協力は必要。子どもたちも地域の方の顔を覚えて安心だと思う。今後も、地域の力を利用して、学校運営に取り組みしてほしい。 ・引き続き、地域も学校と連携して協力していく。 ・すこやか武雄っ子活動推進事業をやっている地区もある。 ・外部講師やサポーターを積極的に取り入れ、質の高い教育がなされていると感じている。 ・ミシンサポーターでは子ども同士の協力しあいの作業に感動した。核家族が多い中、お互いに補いながらの作業だった。	・コミュニティスクール担当・各担任 ・各教科主任
○読書の推進	○読書の推進を図るために、朝読書・家読に取り組む。	○年間貸出冊数の目標を1~2年は100冊以上、3~4年は80冊以上、5~6年は60冊以上とし、80%以上の達成を目指す。	・朝読書の時間には、着席して読書するように指導する。 ・週に2回は図書室の本を借りるように呼びかける。 ・親子で読書ができるよう「家読週間」を設けて充実を図る。 ・図書館まつりに合わせて、表紙パズルに取り組み、達成感を味わわせる。	B	・朝の時間が短く、登校が遅い児童はあまり読めていない。 ・貸出数については、学級によって差がある。1学期貸出冊数目標を、1~2年60冊、3~4年50冊、5~6年40冊と設定したが、目標を超えることができなかった学級があったので、今後も放送等で借りよう呼び掛ける。 ・家庭や学校で読書をしている人は78.8%で80%を越えなかったため、2学期より「家読週間」を開始し、家庭での読書活動を推進している。 ・図書館まつりでは、全学級表紙パズルに取り組み、期間中は貸出冊数も増え、読書に親しんだ。	B	・各学年で見ると、貸出数が学級によって差があるため、放送だけでなく、学年間で図書室に行くように声を掛けていく必要がある。 ・今年度からリレー家読から「家読週間」に変更して、子どもたちや先生たちの負担は減ったが、「本に親しむ習慣が身につくまで」という問いに対し、保護者の肯定的な回答は75.4%から73.6%へ、児童も78.8%から76.0%へと低下した。 ・読書目標冊数の達成や「家読(うちどく)」の推進には依然として課題があると言える。特に「家読週間」のあり方については今後も検討していく必要がある。	B	・「家読」が定着し、本に親しむ習慣が身につけばいいが、保護者の方も読書週間がつけばいいと思う。 ・今の取り組みを継続することが一番だと思う。 ・家庭の意識改善は難しいと感じるが、図書持帰り等の取組で家読週間の向上につながると思う。 ・読書する児童が少ないと思う。 ・教師の手立てがないところに子どもの変容は望めない。創意工夫を期待したい。	・図書館教育担当

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育

5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標や重点目標の実現へ向け、保護者や地域の方の理解と協力を得ながら、全職員で計画に沿って取り組むことができ、保護者評価、学校関係者評価においても好意的な評価であった。 ICT活用では、職員の活用度100%を達成し、児童・保護者からも「授業がわかりやすい」と評価を得ることができた。 キャリア教育の進展においては、学校行事等を通じた児童の意欲喚起等により、夢や目標への意識が向上した。 働き方改革の推進では、長期休業中の研修の見直し等により職員の年次休暇取得が進むと同時に、時間外在校時間の上限遵守も改善した。 児童支援教育では、職員の認識として児童の不安定さを察知しており、全ての児童が「学校が楽しい」と思えるきめ細かな対応を強化していく必要がある。 読書や運動などの生活習慣の改善に向け、学校の取り組みをより深く家庭へ浸透させる必要がある。
----------------	--